「ト思う」と「のだ」について

小野正樹

要　旨

モダリティ研究の枠組みで、「ト思う」と「のだ」についてコミュニケーション機能の違いを追求した。両者とも「寒いと思います」「寒いんです」のように、話し手の主観を伝えることができるが、用法の比較を行うと、「ト思う」述語文の方が聞き手を配慮し、かつ、わきまえ性が高い。そして、両者の原理を明らかにするために、両者が連続した場合を観察すると、「ト思う」が「のだ」に先行する「と思うんです」の場合には主張の文機能となるが、「んだと思います」では理由説明の文機能となり、理由がスコープされるが、その理由が明示的な場合には不自然になることを述べた。

【キーワード】　モダリティ　情報領域　スコープ

On *To Omou* and *Noda*

ONO Masaki

【Abstract】 This paper discusses the communicational function of "to omou" and "noda" in the framework of modality research. "To omou" and "noda", as in "Samui to omoimasu" or "Samuindesu" express the speaker's subjectivity. However, an utterance containing "To omou" expresses more consideration towards the listener and is more modest than "noda".

The sentence "to omoundesu", which is a combines of both expressions, focuses on the reason. But, "nda to omoimasu" is unnatural when the reason is already clear in the utterance.

Keyword : Modality, Information territory, scope

1．はじめに

現代日本語の対話で多く用いられている文末形式に「ト思う」と「のだ」がある。両者の機能は基本的に異なるもので、「ト思う」は思考動詞という点から、ある事態についての主体の思考を表現するものだが、言いかえれば、それは断定できない心的状態を述べたものである。コミュニケーション機能から見れば、話し手自身のマイナス知識[1]を示すことで、聞き手の知識に働きかけるものとなる[2]。一方、「のだ」文に見られる事態の披瀝性（田野村1990）は対局にあり、話し手がプラス知識で、情報提供を行うものである。披瀝性とは田野村（p.12）に従えば、「聞き手には容易に知り得ない種類のことがらを告白する」ものとされ、聞き手がマイナス知識状態で、話し手がプラス知識状態と考えられる。

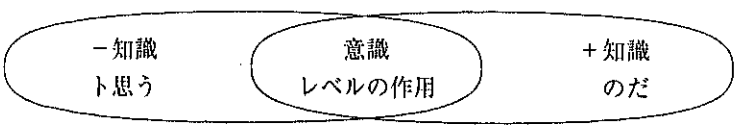
(1)　a　彼が来た。
　　b　彼が来たと思います。
　　c　彼が来たんです。

(1a)の「彼が来た」という言い切りの形（以下直接形とする[3]）は、「彼が来た」という事実報告をしたもので、話し手は聞き手に知識を伝えている。間接形の(1b)と(1c)のうち、(1b)の「ト思う」述語文は話し手のマイナス知識状態を表し、話し手の蓋然性を含んだ意識レベルの表現である。一方、(1c)の「のだ」述語文は直接形と同じく、「彼が来た」ことを知った上での発話で、プラス知識状態である。この場合の「ト思う」と「のだ」では知識レベルから見ると、違いがある。しかし、両者の違いがそれほど明確にならない場合がある。

(2)　a　留学したいです。
　　b　留学したいと思います。
　　c　留学したいんです。

「留学したい」という話し手の意志といった意識レベルの伝達では、3者は発話の状況により表現が選択されるが、(1)の違いとは異なるものである。本論では(2)のような意識レベルの伝達での違いを追究したい。「ト思う」と「のだ」の機能関係を図で表すと、〈図1〉のように表され、重なった部分の違いを追究する。

〈図1〉「ト思う」と「のだ」の機能関係



「ト思う」がマイナス知識、「のだ」がプラス知識の表現であるにしても、意識レベルの表現を表す場合には、両者に重なる機能があると考えるのである。そこで、先行研究を見ながら直接形を加えて、間接形の「ト思う」と「のだ」の用法を探る。

2.「のだ」の先行研究

「のだ」については佐治（1972、1984、1986、1991、1997）、田野村（1990）、野田（1997）、菊池（2000）など多くの先行研究があり、議論が深められてきた。概略を述べれば、機能として「説明」と「強調」が基本にあり、談話においては間接性・和らげ・丁寧さの印象を与える[4]。以下に、各研究者の主張を概観する。

2.1　佐治（1991、1997）

佐治（1991）の視点は「のだ」を「の」という名詞化機能をもった文法要素ととらえ、それに「だ」がついて述べ立ての機能を持ったものという考え方に立ち、「のだ」の中心的性質については次のように述べている。

> 「のだ」は、それの前にある述語によってあらわされている判断が、その判断の出てくる状況(その状況の中には話し手が心の中でよく知っているといったことも含まれる)から、そのままで成り立つと認める表現であり、前の述語の判断を確かなものとして認定する表現である。

この主張は「のだ」の「強調」の機能に関わるものであろう。この後、佐治（1997）では次のように記述している。

> 「Xノダ」は、それが言表される時の状況の中のYなる事態に関わって、Xなる事態が、既定のものとしてあることを言い表すものである。
> Yは、ことばとして言い表されることもあるが、言い表されないこともあり、ことばで言い表すことがほとんど不可能な場合もある。

この記述は佐治（1991）とは異なり、「説明」の機能に焦点が当てられている。そして、用法として、「前提的事態への連関の表現」、「既定事態化の表現」、「品定め的判断の表現」を挙げている。

2.2　田野村（1990）

田野村（1990）では承前性、既定性、披瀝性、特立性の機能を挙げている。承前性とは「言

語的な文脈に現れたことがらや会話の状況中の非言語的なことがらを受けたうえで発せられる」ものであり、既定性とは「文脈や状況においてすでに認められたことがらについて、その背後にある事情を表現するもの」とし、披瀝性とは「文脈上すでに認められたことがらを受けて、その実状を表現する」もので、特立性とは「一つの可能性をほかの可能性から区別して問題とする」ものと述べている。「αを受けて、命題βを（ノダ形式で）提出する」構造で「のだ」を説明している。

承前性の例

(3)　あの音は家の裏を川が流れているんです。

α「あの音は」

(4)　（汗をかいている人に対して）暑いんですか？

α「相手が汗をかいていること」

(3)では会話の状況で音が聞こえていることを承け、(4)では会話の状況で既に知覚したことを承けるとしている。このように非言語的なものを承けているという主張は、場面依存型の表現ということになる。

既定性の例

(5)　あっ、財布がない。（キット）電車の中ですられたんだ。

α「電車の中ですられたのか、路上に置き忘れたのか、いずれが真実であるかは自分にわからないけれども、とにかく自分の知識の及ばないところでは真実がすでに定まっているはずだという話し手の想定」

「のだ」にとって重要なのは「電車の中ですられたのか、路上に置き忘れたのか、いずれが真実であるかは自分にわからないけれども、とにかく自分の知識の及ばないところでは真実がすでに定まっているはずだという話し手の想定」こそが大切であり、「電車の中ですられたことが現に事実として定まっている」ということではないと述べている。

披瀝性の例

(6)　実はわたしにも同じような経験があるんです。

α「私の内心は」

β「実はわたしにも同じような経験があるんです」

この性質は聞き手には容易に知り得ない種類のことがらを告白するような気持ちで表明すると

きに、しばしば用いられるものとされている。

特立性の例

(7)　こどもがどうしてもピアノを習わせてくれと言ったんです。

α「こどもにピアノを習わせている」

β「本人の希望によるものであって、親が強制したものではない」

ことがらαがすでにわかっている状況で、それはどういうことかと言うと、βであって、β'やβ"ではないことを含意しているものと述べている。これは、次に触れる野田（1997）のスコープという考えに近い。

田野村の分析は、「のだ」文を分類したら、この4つのいずれになるかというよりも、こうした性質が「のだ」文にはあると考えた方が自然に思われる。というのも、この4種類の関係は例文を見た限り、複数の機能にまたがっているとも判断できるからである。

2．3　野田（1997）

野田(1997)はムードとスコープの2つに分け、両者の違いを形態的な視点で分類している。前者は「のだ」に前接する内容を必ずしも名詞化していないのに対し、後者は名詞化している点に違いがあることを挙げ、ムードの「のだ」を対事的ムードと対人的ムードに分けている。対事的ムードとは「話し手が、それまで認識していなかった事態Qを発話時において把握したことを示す」（p.80）もので、「聞き手を必ずしも必要としない」ものとし、「状況や先行文脈Pの事情や意味としてQを把握している」関係づけの用法(8)と、「把握した事態をそのまま口にしている」非関係づけの用法(9)があると述べている。

(8)　a　山田さん来ないかなあ。きっと用事があるんだ。

　　b＊ きっと用事がある。

(9)　a　そうか、このスイッチを押すんだ。

　　b＊ そうか、このスイッチを押す。

一方、対人的ムードは「聞き手は認識していないが、話し手は認識している事態Qを提示するときに用いられるもので、必ず聞き手を必要とする」（p.91）ものとし、さらに、関係づけの対人的「のだ」と非関係づけの対人的「のだ」に分けている。

(10) a　「咲いないよ。旅行に行ったんだ。」

吉本ばなな『N・P』p.214

b＊ 咲いないよ。旅行に行った。

このように見ると、「のだ」は非常に幅広いもので、聞き手がいてもいなくても用いられ、かつ、関係づけても関係づけ無くても使用が可能ということになり、「のだ」の本質は何かの説明が欲しく思われる。

もう一点の主張、スコープの「のだ」について見てみよう。否定などの作用が及ぶ範囲をスコープ、その作用を集中的に受ける部分をフォーカスと呼ぶ（p.32）としており、野田の挙げる例と説明を引いておく。

(11) 「あたし、悲しいから泣いたんじゃないのよ」
「……」
「嬉しくて泣いたのよ（後略）」

向田邦子『寺内貫太郎一家』p.155

上記の例について、「泣いた」ことをフォーカスしているのではなく、「悲しいから」が否定のフォーカスだとしている。そして、以下のように結論づけている。

> 述語の一部をフォーカスにする場合にもスコープの「のだ」が用いられる。（中略）「のだ」を用いない文で否定などのフォーカスになるのは、述語全体ではなく、事態の成立である。事態の成立以外の部分をフォーカスにするときには、「のだ」が必要である。（p.39）

野田はスコープを「否定などの作用が及ぶ範囲」、フォーカスを「（スコープ）の作用を集中的に受ける部分」（p.32）としているが、この提案は5．2節で取り上げたい。

2.4　菊池（2000）

菊池（2000）では「のだ」を、「話者と聞手とが、ある知識・状況を共有していて、それに関連することで、話者・聞手のうち一方だけが知っている付加的な情報があるという場合に、その一方だけが知っている付加的な情報を他方に提示するときの言い方が「のだ（んです）」、（その提示を求めるときの言い方）を「のか（んですか）」である」としている。そして、「「のだ」が使われる条件を満たしていても、名詞・形容動詞を述語とする場合は、「のだ」を使わなくてもそれほど不自然ではないという傾向がある」（p.44）と述べている。「のだ」の本質としては肯けるものだが、「付加的な情報」とはどのようなものか、より細かな記述を求めたいところである。

こうした先行研究を踏まえ、本稿で考えたい点は、談話におけるムード用法としての「のだ」

であり、話し手はどのような意識で「のだ」を用い、特に「ト思う」との文法的に置き換えができる場合の意識の違いは何かを探ることにある。

3．「のだ」の談話原理

「のだ」は非対人的な場合もあるが、菊池（2000）の指摘する、話し手が「知っている付加的な情報を他方に提示するときの言い方」という主張を検証してみたい。「ト思う」も聞き手への働きかけを前提とした発話であるため、両者を比較したいためである。菊池の指摘する「付加的な情報」という点から、主観的な表現と結びついた場合の機能は何かについて考察する。形容詞述語文は主観性を含むが、「のだ」と結びついた例である。

(12)　板東八十助：やっぱり今の子はゲーム好きでねえ。
　　僕はあまり得意じゃないんですよ。

日刊スポーツ2000．12．3付

(13)　辻仁成：ものを作る自分と、時代の風を見ている自分がいるのかも知れません。
　　意図的、戦略的というよりは、こういうのをやるとおもしろいな、という遊び心を大事にしているってことかな。
　　仲間と話をしていて、アイデアを出すのがすごく楽しいんです。

日刊スポーツ2001．11．18付

(12)は「ゲーム」について、(13)は「遊び心」ということが聞き手には話題の存在前提となっている。これを直接形と「ト思う」形式に置き換えてみたい。

(12')　僕はあまり得意じゃない｛?です／?と思います｝よ。
(13')　仲間と話をしていて、アイデアを出すのがすごく楽しい｛?です／?と思います｝。

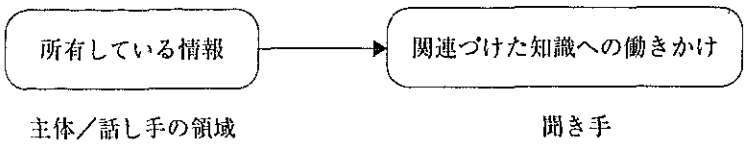
(12')(13')は単独で眺めれば自然だと判断できるが、それぞれのコンテクストへ埋め込むと不自然であろう。それは「のだ」だけが持つ、この文の前文に関する付加的な情報を述べる機能のためである。逆に言えば、前文との関連性[5]を含めた付加的な情報ではない場合に、直接形などが使用可能となる。そこで、次のような機能を考えたい。

【「のだ」の談話原理】
主観的な意識表現を伝える場合にも、より前文や状況に関連性を持たせたい場合には、「のだ」を用いる。ただし、この場合の話し手の知識などの情報量が聞き手よりも多いことが

条件である。

これをモデル化すると、前文や状況への関連性に話し手が気づき、主観的な意識レベルの表現を述べることで、聞き手の知識に働きかける。ただし、聞き手の知識に付加する情報を提供しなければならない。

〈図２〉「のだ」の聞き手への伝達モデル



4、「ト思う」と「のだ」の用法の比較

「ト思う」と「のだ」をどのような意識で、話し手は使用するのか。聞き手との関係で、どのような情報が関連性を持っているのか、直接形とも併せて、聞き手への配慮の点から２点述べる。

4．1　聞き手情報量配慮

寒いという気持ちを回答する場合に、状況により「のだ」が好ましい場合と、「ト思う」が望ましい場合がある。

(14)　A：（Bさんが震えているのを見て）どうしたんですか。
　　B：　寒いです。
　　寒いんです。
　　？寒いと思います。

(15)　A：（日本に来たばかりの人に）気候はどうですか。
　　B：　寒いです。
　　？寒いんです。
　　寒いと思います。

両者の違いは話し手と聞き手の情報量の差による。すなわち、(14)ではBの顔色を見て、Bが不調なことをAは察知しており、それに関連づけた発話である。Bの発話内容は感覚という話し手Bにしかわからないことであるため、聞き手よりも情報量が多く、「のだ」が適切となる。

一方、(15)では、聞き手（B）にとって日本の寒さは、Aの方が日本での滞在時間が長いことから、寒いことについてBよりも知っているため、「のだ」文が不適切となる。これはAよりも情報量が少ないためである。この反証として、次の例では自然となる。

(16) A：　あなたの国の冬はどうですか。
　　B：　寒いです。
　　寒いんです。
　　寒いと思います。

AはBより「あなたの国」についての情報量は少ない。そのため、「のだ」文が許容できるわけである。ここで、「ト思う」でも不自然でないのは、聞き手の所有している寒さや気候の知識に働きかけることが可能だからであろう。(14)の話し手自身の感覚では、自身の感覚について問いかけることはできないために不適切であったが、(15)(16)ではAが「日本の冬が寒い」ことや、「あなたの国が寒い」ことについて、何らかの関連する知識があることを想定して発話すれば、使用が可能となる。

話し手は、聞き手との情報量の違いを配慮して発話している。以上の分析をまとめると、「ト思う」も「のだ」も当該内容の情報を持っていても、話し手にしかわからない情報や、聞き手よりも多く所有しているはずの場合に「のだ」が使用される。一方で、聞き手の思考内容に期待するのが「ト思う」で、聞き手も判断可能だと話し手が判断した場合の表現形式である。こうした選択基準を、聞き手情報量配慮とする。

4.2　わきまえ性

聞き手との関係として、「わきまえ性」を挙げたい。

(17) きっとお嬢様によくお似合いに｛なります／？なるんです／なると思います｝よ。
(18) そんなことなら、すぐに行ってあげるほうが
　　｛いいです／？いいんです／いいと思います｝よ。

例文は「のだ」文の説明で田野村（1990）菊池（2000）で用いられたものである

両文とも文機能としては、聞き手への助言である。助言とは強要ではなく、あくまで勧めであり、この場合には「のだ」は不適切に感じられる。このテストから助言が過度な勧めになってしまう場合に、「のだ」は不適切になることがわかる。そこで、こうした話し手が聞き手に婉曲的に伝える伝達レベルの方略をわきまえ性とする。反対に、わきまえる必要がない場合には、この条件は必要がない。

(17')　だから言ったでしょう。この服にはこの鞄が似合うんですよ。
(18')　こういう場合、常識的にはすぐに行ってあげるほうがいいんですよ。

助言よりも強い場合、例えば、そうするのが当然の行為であるかのように伝える指示や命令では、「のだ」が許容される。同じく、助言のようなわきまえ性がなく、強い主張を行う場合にも、話し手は一つの意見を提示するために、「のだ」が用いられる。

(19) 陳：ですから、普遍的な価値観というのは、強いて求めたらダメなんです。

陳舜臣　田中芳樹『談論　中国名将の条件』p.50

以上の分析から「ト思う」と「のだ」の違いは、「ト思う」形式が話し手の意見を一つの意見として提示するものの、聞き手の知識に働きかける性質から、聞き手の思考を許容する。一方、「のだ」文では話し手の主張が最も確かなものとして、聞き手の主張を考慮しない性質がある。

5.「ト思う」と「のだ」の原理の比較

5.1　連続した場合の情報構造

談話において、「ト思う」と「のだ」が連続して用いられることがある。「ト思う」は話し手のマイナス知識を表し、聞き手の知識に働きかけることがその原理である。一方、「のだ」は話し手が聞き手よりも多くの情報を持って、それを聞き手に付加的に伝えることが原理だが、この両者の原理が「ト思う」と「のだ」の連続した場合に、どのように働くかを述べる。

(20) a　寒いと思うんです。
　　 b　寒いんだと思います。

「寒い」と感じる主体を見ると、(20a) では話し手か、あるいは第3者だが、(20b) では第3者に限られる。こうした違いを情報構造の点から観察したい。そのテストとして終助詞「よ」「ね」の共起性を見る。「よ」は聞き手の持っている情報とは異なる情報を提示するもの、「ね」は聞き手と共感をもたせる機能がある。

(20') a　寒いと思うんです｛よ／ね｝。
　　 b　寒いんだと思います｛よ／ね｝。

本稿では「ト思う」＋「のだ」の順序をA形式、「のだ」＋「ト思う」の順序をB形式として

おく。

形式	例　文	「寒い」主体は誰か	
		よ	ね
A形式	寒いと思うんです	話し手・第3者	聞き手
B形式	寒いんだと思います	第3者	第3者

〈表1〉「ト思う」と「のだ」の連続した場合の主体

A形式の情報構造は、「のだ」が文末にあるため、聞き手より情報量が多くなければならない談話原理がある。聞き手の持っている情報とは異なる情報を提示する「よ」がつくと、話し手のみの感覚を聞き手に伝える「話し手」が主体の場合か、聞き手の感覚とは無関係なものを伝える「第3者」主体の場合で、情報提供を行っている。しかし、聞き手と共感をもたせる「ね」がつくと、聞き手を「寒いと思う」主体にして、聞き手に確認要求している。

次に、B形式を見ると、「のだ」が聞き手よりも多い情報を示すことから、「寒いんだ」は聞き手以外の情報でなければならない。そこで、発話主体の感覚か、第3者の感覚となるが、「ト思う」がつくと、「ト思う」の聞き手も判断可能という条件から、発話主体の感覚を聞き手が判断することができなく、発話主体が排除され、第3者の感覚を述べることになるのである。

5.2　文タイプ

思考内容を伝えるにはその理由の裏付けがあるはずである。そこで、こうした理由の裏付けにどのような「付加的な」情報があるかを観察する。「ト思う」が先行するA形式が(21)で、「のだ」が先行するB形式が(22)である。

(21) 中上：柳田国男は後世に残る本当の学者の一人だと思うんです。

梅原猛・中上健次『君は弥生人か縄文人か』p.92

(22) 里谷：私はノーミスでそのとき降りてきたんで、
それでたぶん優勝できたんだと思います。

ニフティサーブ　年末年始特集（1999年）

文タイプを見ると、(21)は「柳田国男は後世に残る本当の学者の一人だ」という主張である。(22)では聞き手は「優勝できた」ことを既に知っており、その上で「私はノーミスでそのとき降りてきた」という理由が「付加的な」情報となった理由説明の文である。この (21) (22)

の「ト思う」と「のだ」の順序を入れ替えて観察する。

(21') a　柳田国男は後世に残る本当の学者の一人だと思うんです。　【A形式】
　　b？ 柳田国男は後世に残る本当の学者の一人なんだと思います。　【B形式】

主張を行う(21')では、A形式だけが自然で、B形式では不自然に感じられるが、その理由として、「柳田国男は後世に残る本当の学者の一人だとする事態の理由が欠けているためである。「のだ」の「事態の成立以外をスコープする」機能（野田1997）が働き、その要素が欠けているために不自然なのである。そこで(21")のように「先を見通していたので」の理由を述べれば自然となる。

(21") b　柳田国男は（先を見通していたので）後世に残る本当の学者の一人だと思うんです。

一方、(22')では両形式とも自然である。

(22') a　それで（＝ノーミスでそのとき降りてきたんで）たぶん優勝できたと思うんです。
【A形式】
　　b　それで（＝ノーミスでそのとき降りてきたんで）たぶん優勝できたんだと思います。
【B形式】

聞き手との働きかけの点から説明すると、A形式では「それで（＝ノーミスでそのとき降りてきたんで)」という思考と「優勝できた」という事態内容を合わせて、聞き手の知識に働きかけたものとなっている。一方、B形式では「優勝できた」ことは聞き手にとって既存の知識で、新しい情報として、「それで（＝ノーミスでそのとき降りてきたんで)」という理由をスコープして述べる構造である。

A形式（「ト思う」＋「のだ」）：主張
事態について話し手は主張し、聞き手も判断可能な思考内容である。
根拠を明示する必要はない。

B形式（「のだ」＋「ト思う」）：理由説明
事態については情報を共有しており、そのためそれ以上に
根拠を明示する必要がある。

5．3　談話上許容される理由

5．2節の定義を、「寒い」事態を伝える場合を例として検証する。テストとして「エアコンが切れているから」と「2月だから」を共起させてみる。「エアコンが切れているから」は話し手が発見した新たな情報で、「2月だから」は話し手も聞き手も共有している情報とし、聞き手の既存の知識とする。

(23) a　エアコンが切れているから、寒いと思うんです。　【A形式】
　　b　エアコンが切れているから、寒いんだと思います。　【B形式】
(24) a　2月だから、寒いと思うんです。　【A形式】
　　b？　2月だから、寒いんだと思います。　【B形式】

A形式とB形式で発話の意図が異なり、A形式は事態（「寒い」ということ）と理由（「エアコンが切れている」「2月だ」ということ）の文全体が発話したい主張と理解できるのに対し、B形式では理由を新たな情報とした理由説明の文である。文全体の情報構造から見ると、A形式は中立的な表現だが、B形式は理由の部分をスコープしているのである。その際に（23）のような「エアコンが切れている」という話し手の新たな情報の場合には両形式とも自然に感じるが、（24）のように、「2月だから」という情報が聞き手に新たな情報ではない場合には、B形式は不自然になる。

6．まとめ

「のだ」は話し手に情報が多くある場合に用いられ、「ト思う」は聞き手の知識に期待する表現手段である。主観的な思考を述べることは直接形を含めて、聞き手との情報関係で選択される。情報関係として、聞き手の情報配慮と、わきまえ性を挙げたが、これは伝達レベルの問題である。また、両者の原理を、「のだ」と「ト思う」の連続した表現から追求し、A形式（「ト思う」＋「のだ」）が中立的な表現形式で、発話内容すべてを主張していると言えるが、B形式（「のだ」＋「ト思う」）では理由説明の構文であり、理由部分がスコープされている。そして、理由内容は聞き手にとって新しい情報でなければならないことを述べた。

注

(1)　人間の精神活動を知識レベルと意識レベルに分けることを提案したい。知識レベルとは特定の事態についての知識があるか、ないかである。本研究の対象とする文末に主観的要素のある文全体を、命題要素とモダリティ要素に分けるとすると、命題要素について知っているか、知らないかが知識レベルの判断となる。知識を有している場合にはその報告や主張と

なるが、知識がない場合には意識レベルが働き、命題要素についての真偽判断や価値判断を行う。その判断には強いか、弱いかの程度の差があろう。知識については有無が問題となり、意識は強弱が問題となって、言語形式に反映されると考えるのである。また、こうした精神活動は主体の認識レベルに関わるだけではなく、聞き手の知識に働きかけるのか、意識に働きかけるかという伝達レベルにも関わる問題だと考える。

(2)　小野（2001）を参照のこと。

(3)　直接形とは動詞、形容詞、名詞述語文において、「そうだ」「らしい」「ようだ」などの助動詞や「ね」「よ」などの終助詞がつかないものを言い、反対に助動詞や終助詞がついたものを間接形という。

(4)　曾我・松本(1978)を引用すると、The addition of the phrase のです or んです at the end of a statement sentence does not change the basic meaning of the statement itself, but it contributes to the meaning of indirectness, politeness, the situational explanation, or even emphasis. (p.125) として、間接性、丁寧さの機能が挙げられている。

(5)　Grice（1975）の協調の原理によっても、無関係なことを述べることは会話の公理に違反する。

参考文献

小野正樹（2000）「『ト思う』と『ト思っている』について」『現代日本語の語彙・文法』、くろしお出版

――――（2001）「『ト思う』述語文のコミュニケーション機能について」、『日本語教育』110号、日本語教育学会

菊池康人（2000）「「のだ」（んです）」の本質」、『東京大学留学生センター紀要』10号

佐治圭三（1991）『日本語の文法研究』、ひつじ書房

――――（1997）「「～のだ」の中心的性質」、『京都外国語大学研究論叢Ｌ』

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ｉ「のだ」の意味と用法』、和泉選書

野田春美（1997）『の（だ）の機能』、くろしお出版

引用データ

梅原猛・中上健次『君は弥生人か縄文人か』ｐ.92

陳舜臣　田中芳樹『談論　中国名将の条件』ｐ.50

向田邦子『寺内貫太郎一家』ｐ.155

吉本ばなな『Ｎ・Ｐ』ｐ.214

日刊スポーツ2001. 11. 18付　2000. 12. 3付

ニフティサーブ　年末年始特集（1999年）　対談（里谷多英&下村基樹）インターネット版